

ダウン症のある私の長女は口を閉じる力が弱く、小学生になっても滑舌が悪くて発語が不明瞭で、よくかますに丸のみをする傾向もありました。何か良い方法はないものかとコップ飲みが上手になるスプーン、飲み口が小さいコップ、息を吹き付けて飛ばすおもちゃ、ラップなど、さまざまなものを試してみましたが、目に見える成果は得られませんでした。

そのようなとき、表情筋を鍛えて美容に効果があると宣伝していた器具を見つけました。「これで口を閉じる力が強くなるはずだ」と購入を考えていた頃、知人を介して井手友美先生（九州大病院診療准教授）の存在を知りました。「障がい児の口の機能を向上さ

障がい児と口腔機能(上)

せることが滑舌や睡眠などに必ず良い効果が出るはずだから、一緒に研究しませんか」。そうご提案をいただきました。

井手先生は、口腔周囲筋くわうしゅうじんの訓練方法を開発しているFFC社（長崎市）の畑中麻里氏とともに、症例として自ら

一日一題

が携わった「自験例」から口腔周囲筋と機能回復について研究を進めようとされていきました。私にとってこの2人との出会いは、関わってきた多くの障がい児が口に起因するさまざまな問題を抱えていること▽口の力の低下による弊害が過小評価されていること▽そ

山陽学園大准教授 上地 玲子

して口腔周囲筋の訓練こそが課題解決につながる—という点と点がつながって見えた瞬間でした。

地道な訓練の実績を経て、私たちは口の機能を改善する訓練方法の確立を目指した任意団体「クチトレイニシアチブ」（長崎市）の設立へと至りました。その一環として、玉井浩先生（大阪医科薬科大名誉教授）にもチームに加わっていただき、本格的に障がい児の日々の生活と健康・学びに直結させるための口腔周囲筋訓練プログラムの研究開発をスタートさせることになりました。

詳しくはクチトレイニシアチブのインスタグラムをご覧ください。

2024・1・16